

(4) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点について(表-3/p.37, 京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関(定点)名簿/p.200~202)

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関(定点)」は、インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており、診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

平成26年12月末の定点数は、インフルエンザ定点68、小児科定点41、眼科定点10、性感染症定点13、基幹定点1である。

行政区別定点数(平成26年12月末現在)

行政区\定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	7	4	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	4	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京	8	5	1	1	—
西京	7	4	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
合計	68	41	10	13	1

イ 年間報告数、定点当たり報告数の推移(表-4-1~5-2/p.38~41, 図-1~2/p.67)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザの年間定点当たり報告数は、303.78(20,657例)であった。平成19年以降では、インフルエンザ(H1N1)2009の流行した平成21年に次いで多かった。

インフルエンザについての詳細は、「(2) イ 平成26年 インフルエンザのまとめ」(p.3)を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの11感染症の年間定点当たり報告数は、512.34(21,006例)であり、平成19年以降では、平成22年、平成24年、平成23年に次いで多かった。上位5感染症は、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、水痘、咽頭結膜熱の順となり、小児科定点全体の86.9%を占め、最も多い感染性胃腸炎は、60.4%を占めていた。

また、過去5年間(平成21年から平成25年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症は、11感染症中5感染症(RSウイルス感染症、咽頭結膜熱、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ)であった。

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
インフルエンザ	20,657	303.78	1.37 (1.63)
RSウイルス感染症	928	22.63	1.80 (1.17)
咽頭結膜熱	934	22.78	3.15 (1.64)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2, 191	53.44	1.28 (1.09)
感染性胃腸炎	12, 683	309.34	1.08 (1.21)
水痘	1, 210	29.51	0.63 (0.65)
手足口病	641	15.63	0.36 (0.23)
伝染性紅斑	141	3.44	0.48 (2.93)
突発性発しん	796	19.41	1.00 (1.01)
百日咳	7	0.17	0.32 (1.39)
ヘルパンギーナ	1, 245	30.37	1.39 (1.08)
流行性耳下腺炎	230	5.61	0.33 (1.59)
合計	41, 663	816.11	—

(ウ) 眼科定点

眼科定点からの2感染症の年間総報告数は382例であった。

定点当たり報告数は、急性出血性結膜炎が0.70、流行性角結膜炎が37.50で、どちらも前年に比べ増加した。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
急性出血性結膜炎	7	0.70	1.84 (7.00)
流行性角結膜炎	375	37.50	1.33 (1.11)
合計	382	38.20	—

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は436例であり、その内訳は、性器クラミジア感染症261例、性器ヘルペスウイルス感染症80例、尖圭コンジローマ45例、淋菌感染症50例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 0.89、性器ヘルペスウイルス感染症 0.92、尖圭コンジローマ 0.78、淋菌感染症 1.04であり、淋菌感染症が、前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
性器クラミジア感染症	261	20.08	0.94 (0.89)
性器ヘルペスウイルス感染症	80	6.15	0.70 (0.92)
尖圭コンジローマ	45	3.46	1.01 (0.78)
淋菌感染症	50	3.85	1.11 (1.04)
合計	436	33.54	—

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は、9感染症中2感染症で、年間総報告数は17例であった。

ウ 月別の報告状況 (表-6-1～表-10/p.42～50, 図-3～4/p.68～71)

感染症発生動向調査における平成26年の報告週対応表は、<表-1/p.30>に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、この表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別定点当たり報告数は、2月(98.57)、1月(75.97)、3月(61.82)の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別定点当たり報告数は、6月、12月、11月の順で多く、報告数が少なかったのは、8月、10月であった。感染症別報告数の月別1位は、1月～6月、8月～12月が感染性胃腸炎、7月がヘルパンギーナで、2位以下は<表-10/p.50>に示すとおりである。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、<表-6-2/p.43>に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況 (表-11-1～14-2/p.51～58, 図4-4/p.71)

インフルエンザ定点における年間総報告数の年齢階級別割合のうちでは、0～9歳が10,481例で全体の50.7%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く17.5%を占め、以下2歳 11.4%、3歳 10.3%の順であり、4歳以下が総報告数の58.0%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、0～5箇月を除く年齢階級で感染性胃腸炎が1位(0～5箇月はRSウイルス感染症が1位)であり、2位は、6箇月～1歳では突発性発しん、1～2歳ではヘルパンギーナ、3歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、30～39歳が31.2%と最も高く、次いで0～9歳が29.3%、20～29歳が14.4%であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が28.0%、25～29歳が17.2%、30～34歳が13.5%、15～19歳が11.9%、35～39歳が11.5%の順であり、15～39歳が82.1%を占めた。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、<表-15-1～18-2/p.59～66>に示すとおりである。